

研究の実際 1

(部別研究の内容)

小学部 児童の将来を見据えた指導
～給食に関するチェックシートの作成を中心に～

1 はじめに

今年度の小学部は、男子22名、女子3名の計25名の児童が在籍しており、重複障害学級2学級を含む8学級で構成されている。各クラス単位の授業形態の他に、遊びの指導（低学年のみ）・音楽・体育や生活単元学習の一部は、グループで活動している。グループは、1年生から3年生の低学年グループ（12名）と4年生から6年生までの高学年グループ（13名）の二つである。

平成24年度から開始されたキャリア教育推進事業を受け、全校で研究に取り組んでいる。小学部のキャリア教育指導目標は、「生活経験を豊かにしながら、自分で取り組もうとする意欲や日常生活に必要な知識、技能を身に付ける。」としている。この研究に取り組む中で、小学部段階では、「主体的に取り組む力の育成」と「基本的生活習慣の育成」を重要なキーワードとして挙げ、どの学習場面においても、この二つを意識して計画、実践し、指導支援に当たっている。また3年目となる平成26年度は、技能検定の導入を受け、さらなる日常生活の指導の充実のために具体的な指導方法についても研究を行った。

この3年間の研究の経過を、26年度の取組を中心にまとめる。

2 研究の流れ

平成24年度は、各教員一人一人が自分の担当する授業について、キャリア教育を意識し、「授業における観点別位置付け・授業改善シート」を作成した。また、教科別の指導と生活単元学習の研究授業を行った。児童が自ら物や人に関わり、意欲的に活動する授業を目指して行った指導の工夫や見えてきた課題を、「指導支援」「活動展開」「環境設定」に絞って検証し、協議する中で、児童の成長を後押しするための授業づくりのポイントが見えてきた。その主なものを下表に示した。

検証観点	授業づくりのポイント
指導支援	<ul style="list-style-type: none"> ・児童の気持ちを想像し、意欲的に取り組める活動 ・褒められたことを実感できるような褒め方 ・子どもの気持ちに寄り添った臨機応変な対応 ・活動前後の十分な協議と意見交換
授業展開	<ul style="list-style-type: none"> ・活動の中で学ぶ活動時間の確保 ・興味関心に基づき、実態に応じた活動の組合せ ・分かりやすい課題と十分な反復
環境設定	<ul style="list-style-type: none"> ・活動に適した広さの設定 ・図と地の区別が明確な提示 ・視覚的な支援のある環境設定

これらのポイントを基に授業改善を行い、共通する課題についても協議を重ねた。「実態把握」「ティームティーチングの在り方」「活動の般化」などの共通する課題が出た。

平成25年度は、引き続き「主体的な活動」を目指し、各学年グループによる生活単元学習の授業研究を行った。前年度は、キャリア教育的な視点を教員が理解する

ために大まかな授業研究を行ったが、2年目は生活単元学習に絞り、各学年部で一つの単元を深く掘り下げて研究した。キャリア教育の四つの領域「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」の四領域ごとに児童に育てたい力を具体的に考え、各単元の学習展開を観点別シートで分析し、領域別の狙いが偏らないように目標を考え、展開の工夫をした。

また並行して基本的な生活習慣の確立を目指し、日常生活の指導に関するチェックシートの作成を行った。日常生活の指導は、児童の自立に向けた取組としてどの教員も行っているが、統一した指標はなく各教員の判断によるところが大きかった。また、引継ぎ文書も担任によって記載内容に差が生じており、文書のため読みづらく、児童の実態把握がしにくいという問題点も上がった。そこで、児童の実態が簡潔に把握できるとともに次の段階の指導が分かるもので、引継ぎ資料としても活用できるものを作成することにした。日常生活の指導の中でも特に給食前後の活動に焦点を当てた。給食指導は、児童の興味関心が高く、指導が段階的、計画的に行える。また、毎日行う活動なので、成果も見やすく、児童の自己評価も分かりやすい。まずは「給食に関するチェックシート」の検討・作成を行い、児童の自立に向けた段階的な指導を目指すことにした。チェックシートは、1学期末と3学期末にチェックし、活用した。

3 平成26年度の取組

技能検定が導入され、小学部においても技能検定の各項目を意識することによって、指導支援を見直すことができるのではないかと考えた。検定のマニュアルを読み解き、協議する中で、それらを取り入れることが日常生活の指導の改善につながると考えた。そして、それらの内容を前年度に作成したチェックシートに反映することにより、さらに場面を限定して指導の評価が可能となると仮定した。

(1) 研究の目的

- 日常生活の指導におけるチェックシートを活用、改善することによって、段階的に基本的な生活習慣の指導を行う。
- 技能検定の項目を受け、精選した場面での具体的な指導方法を探る。

(2) 研究の方法

- ア 技能検定の内容を踏まえた「日常生活の指導」について検討する。
- イ 小学部で取り入れる検定のポイント毎にグループを作り、グループ別研究、実践を行う。
- ウ 「給食に関するチェックリスト」を見直す。

(3) 実践内容

【「日常生活の指導」について検討】

まず、技能決定のテキストの分析を行った。小学部で取り入れられる項目を検討し、「挨拶」報告「清潔（手洗い）」「畳むこと」の4項目について取り組んでいくことにした。「挨拶」については、小学部全体で取り組む内容とし、分離礼での挨拶、名前を呼ばれたら返事をするという2点に絞った。分離礼による挨拶については、高等部や体育で既に行われており、全校で取り組むこととなった。高等部での事例を参考に授業や体育、職員室等への出入りでの挨拶についてイラスト入りのプリント（図1、2、3）を作成し、全教職員の共通理解を図り実践した。



図1 分離礼の要領

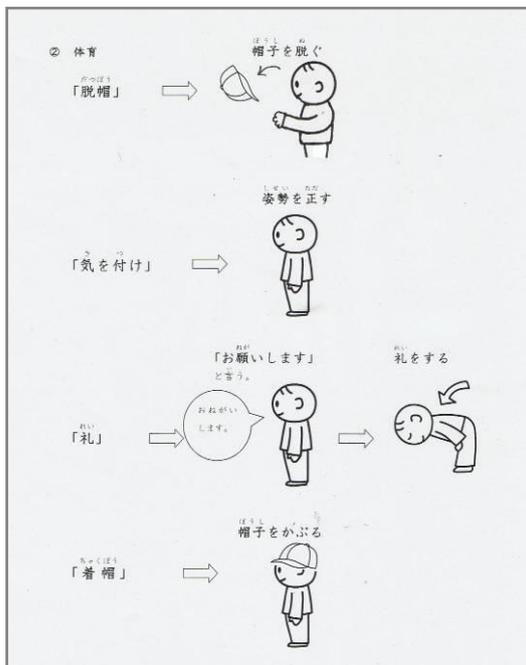


図2 体育時の要領



図3 職員室出入りの要領

【グループ別の研究と実践】

「報告」「清潔」「畳むこと」の3項目についてグループ別研究、実践を行った。この3項目のうち、どれに重点を置いて取り組むか、受け持つ学級の児童の実態に応じてグループ毎に研究内容を絞り込み、研究・実践を行った。また平成25年度に作成した「給食に関するチェックリスト」を見直した。挨拶指導と各グループの実践は、次の通りである。

「挨拶」指導の実践

<p>児童の実態</p>	<p>挨拶を自分からする児童は少なく、声が小さい、視線が合わないなどの課題があった。また、お辞儀をすると挨拶の言葉が言えない、挨拶の言葉を意識するとお辞儀ができないといった実態があった。職員室等特別教室への入退室の際の挨拶指導は、担任によって少しずつ異なり、児童は言われる言葉を繰り返し伝えていることが多かった。</p>
<p>手立て</p>	<p>高等部が実施している分離礼を取り入れ、全ての挨拶を「挨拶の言葉を言うこと」と「お辞儀をすること」に分けて行うようにした。全教職員に配付した資料を基に、朝の会や終わりの会での挨拶、授業、体育の挨拶について「挨拶の言葉」や流れを統一した。教員が実際に見本を示して練習したり、職員室入り口には、挨拶の仕方をイラスト入りで掲示し、それを見ながら一緒に確認したりした。職員室での挨拶は、教職員みんなが挨拶の仕方を把握したため、指導や評価も職員室で児童と関わったいろいろな教員が行うようになった。</p> <p>挨拶の言葉を言うことが難しい児童は、片手を上げて教師とタッチするなど表現方法を児童の実態に合わせて考えた。</p>
<p>実践と児童の変容</p>	<p>分離礼は児童に分かりやすくそのやり方にすぐに慣れた。「挨拶の言葉を言う」「お辞儀をする」と二つに動作を分けたことで、一つ一つの動作をじっくり行うことができ、挨拶が難しかった児童が、口を開け、口形模倣を行い挨拶の言葉を話そうとしたり、自分からお辞儀をしようとしたりした。</p> <p>また、職員室での挨拶は、全教職員が周知しているので、担任が付かずに一人で職員室にお手伝いで行った際にも挨拶指導を受けたり、褒められたりすることにより一人でお手伝いを進んでしようとする児童もいた。</p> <p>学校全体で挨拶を意識することで、自然に手を挙げて挨拶したり、お辞儀をしたりする姿が多く見られるようになった。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="text-align: center;">  <p>学級での挨拶</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>手を挙げて挨拶</p> </div> </div> <div style="text-align: center; margin-top: 20px;">  <p>体育での挨拶</p> </div>

「清潔（手洗い）」グループの実践

<p>児童の実態</p>	<p>洗う前に袖を上げない、手を水でぬらさずに洗剤を出す、水道水を出しっ放しで洗う、洗剤を口に入れる、手に付けた洗剤をすぐに水で流している、すすぎ洗いが不十分など問題点が多く、常に言葉掛けが必要であった。また、指導する側の意識や方法が学年によって違っており、一貫した指導がされていないために、手洗いの手順が身に付いていないことが分かった。</p>
<p>手立て</p>	<p>学部内で手順を統一した。児童が手洗いを意識して自主的に取り組めるように歌を取り入れ、手順表及び自作CDを作成することにした。</p> <p>手順については、技能検定テキストの【商品化】解説に示してある手順に統一した。また、曲や歌詞（手洗い動作の名称）が児童に親しみやすいと思われる「ビオレあわあわ手洗いのうた」を参考にした。</p> <div data-bbox="395 607 1273 790" data-label="Image"> </div> <p style="text-align: center;">手洗い手順表</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 歌について <ul style="list-style-type: none"> ・CDに録音して各学級に配り、実態に応じて活用する。 ・手洗い前の「袖を上げる」「手をぬらす」「水道を止める」の手順も入れてアレンジし直す。 2 手順表について <ul style="list-style-type: none"> ・歌に合わせた手順表を作成し手洗い場の児童が見やすい位置に掲示する。 3 認定証システムについて <ul style="list-style-type: none"> ・「手洗い名人認定証」を作成し、認定された児童を学部掲示板で紹介する。
<p>実践と児童の変容</p>	<p>歌を覚えて一人で手洗いをする、教員が歌を歌うと手を洗おうとする、歌の間は泡を流さずにいるなどの変容が見られた。また、手順表があることで、順番を意識して洗おうとする、歌詞が覚えられていなくても自分で順番を確認するなど、自主的に取り組む児童が増えた。中には、模倣が難しい、こだわりや感覚過敏があるなどの理由で、手順に沿った手洗いが難しい児童もいるが、手洗いと聞くと蛇口を開け閉めしようとする、以前より嫌がらなくなったなど、どの児童も何らかの変容が見られている。また、「認定証システム」によって、合格して認定証を受け取り喜んだり、合格するために努力したりする姿が見られている。手洗い名人が更に増えるように指導を継続したい。</p> <div data-bbox="272 1547 1377 1816" data-label="Image"> </div>

「畳むこと」グループの実践

<p>児童の実態</p>	<p>児童が生活の中でハンカチや雑巾を扱うことはよくある。しかし、ハンカチや雑巾を端と端を合わせて畳む意識がある児童はあまりいなかった。ハンカチをつかんだそのままの形で広げずに拭き、そのままポケットにしまう児童が多かった。また、雑巾絞りも両手でぎゅっと握りしめるだけで終わっている児童が多く、しっかりと絞れていなかった。</p>
<p>手立て</p>	<p>技能検定【清掃】の項目で取り上げられていたタオルの畳み方より、端と端を合わせて畳むことを目標にした。</p> <ol style="list-style-type: none"> 手順表について 右のようなイラストや写真と文字入りの手順表を作成した。トイレ、教室の手洗い場のそばに「ハンカチの畳み方」を掲示した。また、「雑巾の絞り方」を教室のバケツを置く場所に掲示した。そして、力が入りやすいとされる雑巾の縦絞りについても手順表に加え、児童が意識できるようにした。 雑巾への印について 雑巾には赤や青で合わせる角同士が分かるように同じ色の印を付けた。また、雑巾掛けに掛ける際の目安となるように雑巾の中央に線を加えた。 言葉掛けについて ハンカチ、雑巾の印をなくした後も使えるように「端と端。」と言葉でも伝えるようにした。
<p>実践と児童の変容</p>	<p>手順表を教師と一緒に繰り返し確認することで自分からハンカチを広げ出した児童、ハンカチの端と端を意識して畳むようになった児童がいた。また、「ハンカチの畳み方」の手順表の最後にあるイラストを見て、褒められることを楽しみにする児童もいた。</p> <p>雑巾についても印を手掛かりにして一人で畳んだり、掛けたりするようになった児童が増えた。印をなくしても雑巾の端と端を合わせて畳んだり、縦絞りで絞ろうとしたりする児童もいた。</p> <p>しかし、「ハンカチを畳む」学習はまだ般化がされていない。練習した以外の場面でも、できることを目標にして引き続き取り組んでいきたい。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around;">      </div>



「報告」グループの実践

<p>児童の実態</p>	<p>高学年は、給食の配膳活動において係を決めて取り組んでいる。しかし、一つの係活動が終わったときに「終わりました。」「できました。」などの報告は行わず、自分から次の活動に進んだり、指示を待って次の活動を行ったりしていた。こだわりのある行動が見られる児童は、おわんや箸の位置に固執して指示に従えないような場面もあった。</p>
<p>手立て</p>	<p>各自の役割を写真で作成し、毎日確認してから活動を始めるようにした。配膳作業の準備などで、足りない物を教員に伝える報告、作業の終わりを教員に伝える報告などを指導場面とした。報告は音声言語だけでなく、手を挙げて行う、教員の肩をたたいて身振りをする、カードを見せるなど児童にあった報告の仕方を検討し、以下のような方法で実践した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 1番目に行う係活動を決めておく。終わったら、「終わりました。」の報告をする。次にしたい係活動を選んで、教員に伝える。終わったら、「終わりました。」の報告をする。 2 活動を行いやすくするために、環境について見直しをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・配膳スペースを広げるために、お盆を縦に置く。 ・名前カードは、お盆の縁に挟めるようクリップを付ける。 ・お盆の上に置く食器や食品の位置の見本カードを作る。 <div data-bbox="1171 788 1393 976" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="432 1048 737 1308" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="510 1328 675 1361" data-label="Caption"> <p>給食当番表</p> </div> <div data-bbox="833 1048 1246 1350" data-label="Image"> </div>
<p>実践と児童の変容</p>	<p>役割がはっきり決められたことで、児童は自分から配膳活動に取り組み、終わったときに報告するようになった。しかし、一人で活動することが難しく教員の支援が必要な児童や、手元に配るものがなくなるとじっとしてられない児童は、自分から教員へ報告することはなく、促されての報告となっている。今後も各自の目標を明確にして取組を続けたい。</p> <div data-bbox="304 1619 767 1924" data-label="Image"> </div> <div data-bbox="842 1619 1326 1939" data-label="Image"> </div>

4 成果と課題

(1) 挨拶指導

あらゆる場面で分離礼に統一することにより、一貫した指導を意図的に行い、相手が誰であっても同じ評価を得られることが成果を生んだ。分離礼の方法は、児童に分かりやすかったようだ。「挨拶言葉を使う」「お辞儀をする」と二つの動作を分けて行うことが、二つのことを同時に行うよりも実態に合った方法であった。身体機能面で難しいだろうと思われた児童であっても、その子なりに頭を下げたり、膝を屈伸してお辞儀の様な身振りをしたりするようになった。同時礼を指導していた時期も挨拶指導に力を入れて取り組んでいたが、複数のことを同時にすることが困難な知的障害の特性に反したことを強いていたのかも知れない。分離礼の指導に切り替えることで、頭を下げるという動作を身に付けた児童が明らかに多くなった。

(2) チェックシートの改善

ア 手洗いについては「手を洗う」「手を拭く」の2項目であったが、特に重要な手洗い動作を取り上げ「手を洗う」の項目を更に「おねがいのポーズ」「カメのポーズ」「お山のポーズ」「泡を流す」の4項目に細分化した。

イ 「端と端を合わせて畳む」取組は、ハンカチやおしぼり、タオル、台拭き、雑巾を畳むときに活用される。給食に関して言えば、給食準備の「手を拭く」、後片付けの「おしぼりや箸をケースに片付ける」、配膳の「台拭きをぬらして各テーブルに配る」に関わる。チェック項目を増やすのではなく、ポイントとしてそれぞれ「※端と端を合わせているか」を備考欄に追加する形で改善し、詳細については特記事項に記入するようにした。

ウ 報告に関する項目がなかったので、配膳の中に「終わったことの報告をする」「余ったことが言える」「足りないことが言える」の項目を増やした。次ページの資料に改善したチェックシートを掲載している。字体を変えている部分が26年度に改善した部分である。

これらの活動については、給食指導のみならず、学校生活全般あらゆる場面で共通して指導する場がある。一つ一つの指導の方法を部内で統一し、その評価を給食場面で行い、チェックシートに記入していくことで指導におけるPDCAサイクルが確立する。本校は、小学部全員が食堂に集まって給食を食べている。普段関わりの少ない教員からも言葉掛けや賞賛を受けることが児童の励みや自信につながり、自分からやってみようとする主体的な行動へと結び付いた。手洗いでは、誰も見ていなくとも声に出して歌いながら手洗いをしている姿が見られた。授業場面では、活動を終わると「終わりました。」の報告を言葉や身振りで表す児童が増えた。

しかし、どのように成果の上がった指導方法であっても継承していくことが最も大切であり、また難しいことである。今年度の成果を踏まえ、これを継続して行い、他の活動にも広げて児童の自立につなげていきたい。

資料 給食に関するチェックシート

① 給食準備に関するチェックシート

	項 目	年	
		7月	3月
準	エプロンを着る		
	手を洗う	「おねがい」のポーズ	
		「カメ」のポーズ	
		「お山」のポーズ	
泡を流す			
備	手を拭く		
	消毒をする		
	おしぼりや箸をケースから出す		
	食器を運んで自分のお盆へ置く		
	お盆に一人分ずつ配る		
	特記事項		

※ハンカチやおしぼりは、畳んでいるか

② 食事に関するチェックシート項目

	項 目	正しい姿勢	
			背筋を伸ばす
食	みんながそろそろまで待つ	肘をつかない	
		食器を持つ	
	「いただきます」「ごちそうさま」のあいさつをする	口を閉じてかむ	
		食事中は席を立たない	
		時間内に食事をする	
		手や口をおしぼりで拭く	
	手づかみで食べる	好き嫌いなく食べる	
		主食と副食を交互に食べる	
道具を使って食べる	スプーン		
	フォーク		
	支援箸		
	箸		
一口の大きさのものをかんで食べる	箸が落ちたら洗ってくる		
適量をかみきって口に取り込む	よくかんで食べる		
パンをちぎって食べる	要求を伝える	おかわり	
		減らす	
ストローをさす		ごちそうさま	
飲む	ストロー		
	コップ		
デザート	果物の皮をむく		
	容器を開ける		
	特記事項		

③ 後片付けに関するチェックシート項目

後片付け	項 目
	食器の片付けをする
	丁寧に食器を扱う
	おしぼりや箸をケースに片付ける
	エプロンを畳む
	テーブルを拭く
	歯を磨く
	水を口に含む
	飲まずに吐き出す
	ブクブクうがいをする
	特記事項

※チェックリストへは、
 一人で・・・○
 指 示・・・指
 介 助・・・介
 未実施・・・未
 通 過・・・\
 と記入する。

※おしぼり、台拭きは、畳んでいるか

④配膳に関するチェックシート項目

配膳	項 目			
	お盆を並べる（席の並びに）			
	名前カードと先生カードを置く（座席表と対応させる）			
	配る	・湯飲み ・牛乳	1対1対応で	
		・箸 ・デザート	順番に	
		・ドレッシング類	指定された数ずつ	
	先生の席を見分けて配る			
	つぐ	数を意識してつぎ分ける	トング	1対1対応
				見本を見て
		見本と同じ量をつぎ分ける	トング	しゃもじ
				おたま
	お茶をつぐ（適量をこぼさずに）			
	台拭きをぬらして各テーブルに配る			
	報告	終わったことを伝える		
		余ったことを伝える		
足りないことを伝える				
特記事項				

※台拭きは、畳んでいるか

中学部 生徒の将来を見据えたキャリア教育の実践
～授業実践を通して主体性や主体的行動の質を高める取組～

1 はじめに

今年度、中学部では、高等部の「愛顔（えがお）のえひめ特別支援学校技能検定」受検に向けた取組をきっかけとして中学部段階で育てたい力について考え、それを踏まえて授業実践に取り組むことにした。「生徒の将来を見据えたキャリア教育の実践」のテーマの下、～授業実践を通して主体性や主体的行動の質を高めるための取組～をサブテーマとし、6月の校内研修での上岡一世先生の講演を受けて、「キャリア教育の理解が技能検定の理解に通じる」「キャリア教育の充実が特別支援教育の充実につながる」といった視点に立ち、授業実践を通して「生きる力・実社会に通用する力」の育成につなげようと考えた。

2 目的

- ・技能検定の項目から、生徒の興味関心に基づいた内容を単元で取り上げ、意欲的に行動する力の育成を目指す。
- ・生活単元学習の中で、主体性の育成をねらった授業を考え、実践を重ねる。また、自分たちの生活空間を整えたり、清潔についての理解を深めたりする。上記の3点を目的とし、自分に必要な支援の理解につなげ、主体的行動の質を高めていける授業実践を試みる。

3 方法

各学年部に分かれて取り組む。1年部では、技能検定の項目にもある清掃を取り上げて、日常的にきれいな空間で過ごすことや、「きれい」「汚い」の区別がつくこと、清掃に使われる道具を作ったり、新しい道具を使ったりすること、きれいにする気持ちを育てることなどについて取り組んだ。2年部では、生徒の主体性を育てるための授業を考えるという視点で、修学旅行の事前事後指導を取り上げ、指導案を書いて授業研究に取り組んだ。また、日々の授業においても主体性に視点を当てた実践の積み上げをまとめた。3年部では、技能検定の項目にもある接客とつなげて、人との応対などのスキルアップを目指し、総合的な学習の時間の「カフェを開こう」の実践の中で主体的に取り組むことを目標に取り組んだ。

(1) 目標設定、実践計画等の立案

(2) 授業実践・・・指導案の中に、主体性を引き出す工夫や支援を載せる。実践記録を蓄積する。

(3) 研究授業の実施

(4) 評価

- ・授業研究を行い、目標に対して達成できたかどうか評価する。
- ・課題の整理、まとめをする

4 実践内容 1 (中学部 1 年部)

目標	毎日「清潔できれいな環境」で過ごす。	
取組	生徒の様子	備考
教室環境の整備 ・ 掲示の仕方 ・ 文具類の片付け方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教室には必要最小限の物を置いた。生徒への刺激が減り、スムーズに動くためのスペースも生まれた。 ・ ファイルや教科書、文具類の置き場所を決め、生徒はいつでも自分で必要な物を出し入れした。 	
荷物の整理整頓 (週末) ・ ロッカーの整理 ・ 机の中の整理	<ul style="list-style-type: none"> ・ ロッカーや机の中を定期的に点検した。いらなくなった物はその都度捨てた。生徒は、必要な物とそうでない物とを区別した。 	
ごみ捨て	<ul style="list-style-type: none"> ・ ごみをためずに定期的に捨てた。生徒は、ごみがたまると気にするようになった。 	

目標	いろいろな場所の掃除の仕方を身に付ける。	
取組	生徒の様子	備考
机拭き ・ 雑巾の使い分け ・ 正しい拭き方	<ul style="list-style-type: none"> ・ 机やロッカー専用の雑巾を自分で作った。使い終わると専用の物干しスタンドに干した。生徒は、拭く場所によって雑巾を使い分けることを学習した。 ・ 技能検定の手順で拭くと、拭き残しがなくなった。 	
窓ガラス拭き ・ モップや水切りの使用	<ul style="list-style-type: none"> ・ 雑巾や新聞ではなく、窓ガラス拭き専用の道具 (スクイジー) を使った。生徒は、珍しい道具に大変興味を持った。 ・ 専用の道具を使うと拭き残しが分かりやすい。生徒は、自分の目で汚れを確認し「きれいにしよう。」という意欲につながった。 	

<p>中庭掃除</p> <ul style="list-style-type: none"> ・落ち葉集め ・草引き 	<ul style="list-style-type: none"> ・台風後の汚れを掃除した。落ち葉を集めるとき、ゴミ袋も一緒に移動させると掃除しやすいことに気付いた生徒がいた。 	
<p>階段、廊下</p> <ul style="list-style-type: none"> ・掃き掃除の仕方 ・拭き掃除の仕方 	<ul style="list-style-type: none"> ・階段は床と違い、一段ずつ降りながら掃いたり拭いたりすることを学習した。 ・廊下の両側にコーンを置き、左右に拭きながら進む方法を身に付けた。 	 

<p>目標</p>	<p>掃除に親しみを持ち「きれいにしよう。」という気持ちを持つ。</p>	
<p>取組</p>	<p>生徒の様子</p>	<p>備考</p>
<p>雑巾作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的に雑巾を新しく作った。新しい雑巾で掃除をすると、汚れが分かりやすい。ロッカーを拭いた生徒が「こんなに汚れています。」と言って驚く場面があった。掃除道具を新しくすることは大切である。 	
<p>たわし作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・アクリル毛糸を使い、手洗い場用のたわしを作った。生徒は、毛糸を巻いて何が出来るのか不思議そうだった。完成したたわしで手洗い場を洗うと、何のための道具か理解でき楽しそうに掃除した。 	 

<p>布巾作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> 調理室を使う度に、生徒が台布巾と食器用布巾を間違えた。新しい布巾を縫い、古い布巾と比べて色や清潔感の違いを確認した。 それぞれの布巾に「ふきん」と布テープで表示した。後日、調理実習を行った。色の白さと「ふきん」という表示によって、布巾を間違えて使う生徒が減った。 	
<p>掃除用の棒作り</p>	<ul style="list-style-type: none"> 身近な材料を使い、学校には置いていない掃除道具を作った。 出来上がった道具が、どのように役立つのか教室の掃除をした。手本を示すと、窓の棧だけでなく、パソコンのキーボードやロッカーの隙間など狭い場所を生徒が掃除し始めた。 	

(1) 成果と課題

学校教育においてキャリア教育の充実が求められる中、高等部では技能検定への取組が本格的に始まった。本研究に取り組むに当たり、高等部への進学を見据えて、中学部の生徒がどのような能力を身に付ければよいのか、という疑問があった。技能検定や現場実習等に生かせる技術や知識を教えるのも一つの方法であるが、それらを支えるための意欲や「何のためにするのか。」という目的を生徒に持たせることが中学部段階では大切だと考えた。

1年生では、「掃除」に注目して研究を進めた。掃除は日常生活の中で必要なことであり、毎日行っていることである。しかし生徒は、「掃除の時間だから。」という意識で行っていることが多く、掃除を必要なことと感じ、汚れているからきれいにしようという意識はほとんどなかった。まずは教室の環境整備に努め、生徒が毎日「整った環境」で過ごせるようにした。次に生徒と一緒にいろいろな場所の掃除をし、いろいろな「汚れ」について気付くきっかけを作った。最後に、掃除道具を手作りし、掃除に関心を持ち「楽しさ」を味わった。

これらの取組を通して、生徒は以前より掃除を身近なものと感じ、基本的な掃除の仕方を学習した。今後の目標は、自ら「きれいにしよう。」という気持ちを持ち、汚れた場所を自主的に掃除する生徒が増えることである。そのような自主

性が、高等部での技能検定や実習、より良い進路につながっていくものだと考える。

5 実践内容2（中学部2年部）

単元「修学旅行」は、たくさんの行事の中で、生徒が楽しみにしている活動の一つである。年度当初より、修学旅行の行き先などについて生徒に投げ掛けを行い、興味関心が持てるようにしていた。これまでの事前学習では、教員が情報を提供することの方が多かったが、今回は生徒自身が修学旅行について興味・関心を持ち、自分たちで知ろう、学ぼうとする姿勢を育てようと考え、この単元を取り上げた。

2年部では、全学級で「授業における観点位置付け・授業改善シート」を作成し、授業研究を行った。

（1）事前学習の取組

主題	調べ学習発表会	
目的	情報を自ら収集し、考え、行動できるようにする。	
主たる観点 関連する観点	情報収集と活用（情報活用能力） 生きがい、やりがい（将来設計能力）	
授業内容	工夫点	
<ul style="list-style-type: none"> ・学級で調べることを決める。 ・自分たちが調べたことを全員の前で発表する。 ・学級対抗にして、優勝学級を決める。 	<p><具体物の製作></p> <ul style="list-style-type: none"> ・海遊館の生き物を立体で作成、紹介した。 <p><ICTの活用></p> <ul style="list-style-type: none"> ・タブレット端末機やスマートフォンを活用し、操作をすることで発表できるように工夫した。 ・DVDを流し、実際に動く新幹線の様子を提示した。 	
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちでインターネットを見たりパンフレットを見たりして、情報収集する力を付けた。 ・友達が発表することで、より興味深く話を聞こうとする姿勢が見られた。 ・生き物の大きさや色などを知り、修学旅行への期待が深まった。調べた生き物の簡単な質問に答えられるようになった。 ・視覚的教材を多く活用したことで、音声言語のみでは分かりにくい生徒も自分で選んだり確認したりできた。 ・全員に役割があり、一人一人活躍の場を設けたことで、 	

	発表に対する緊張感や達成感を感じる生徒が多かった。 ・学級対抗にしたことで、トロフィーを目指して大きな声を出そうとするなど主体的に取り組もうとする様子が見られた。
主題	バイキング形式の食事について
目的	マナーを守ることの大切さを知らせる。
主たる観点 関連する観点	場に応じた言動（人間関係形成能力） 自己選択（意思決定能力）
授業内容	工夫点
<ul style="list-style-type: none"> ・バイキングのマナーについて学習する。 ・学習したことを実践する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動画を作成し、正しいマナーと間違ったマナーを生徒に知らせた。クイズ形式にして、生徒自身で考える場面を設けた。 ・確認後、すぐに実践に移れるよう、話を聞く教室と実際にバイキングを行う教室を分けた。 
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・知っている教員が出ているので、より興味を持って動画を見た。 ・すぐに実践に移すことで、自ら気を付けてバランス良く料理を取る様子が見受けられた。 ・普段の生活でもバランスよく食べるよう気を付けるようになった。

(2) 事後学習の取組

主題	修学旅行を振り返ろう
目的	楽しかった思い出を振り返る。自分の感想などを発表する。
主たる観点 関連する観点	肯定的な自己評価（意思決定能力） 自己選択（意思決定能力）
授業内容	工夫点
<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオを見て、修学旅行を振り返り、感想を発表する。 ・好きな写真を選び、コラージュを制作する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員でビデオを視聴し、感想を発表した。 ・いろいろな写真を用意し、楽しかった活動や印象に残った活動を選べるようにした。 
生徒の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・ビデオ視聴の際には、「〇〇した。」「〇〇を食べた。」など、生徒たちから自由な発言が見られた。 ・自分が写っている写真を興味深く見たり、好きな場所に貼ったりして、修学旅行を振り返った。

(3) 成果と課題

ア 成果

- ・単元「修学旅行」は、生徒が楽しみにしていた活動であり、事前・事後学習に意欲的に取り組む場面が多く見られた。
- ・事前学習では、生徒が興味を持ちやすいように動画の準備をしたり、調べ学習発表会を行ったりしたことで、自ら情報を得ようと集中する様子が見られた。
- ・修学旅行当日は、事前学習で学んだことを覚えている生徒も多くいた。情報を与えられるだけでなく、自ら調べたり考えたりしたことで、実際の旅行の場面で事前学習を生かすことができた。
- ・事後学習では、写真や動画を使って思い出を振り返ることで、より具体的にフィードバックできた。また、発語のない生徒も、自分で好きな写真を選ぶことで、楽しかった思い出を伝えたり、表現したりすることができた。

イ 課題

- ・他の行事や教科学習等も平行して行うため、事前・事後学習の時間を十分に取ることが難しかった。事前の教員間の打合せを綿密に行い、計画的に学習を進めていく必要がある。
- ・今回は学級・学年全体の大きな目標にしたので、生徒一人一人に焦点を当てることができなかった。個に応じた目標設定を行い、実践を積み上げていく必要がある。

今回行った「修学旅行」の単元では、もともと生徒が興味を持ちやすい単元だったこともあり、どの活動にも意欲的に取り組む様子が見られた。生活単元学習を行う際には、自分たちで「知りたい。」「分かりたい。」「学びたい。」と思えるように工夫してきたつもりであったが、今回の研究を通して、もっと教材等を工夫する必要があることに気が付いた。

「修学旅行」を通して、生徒の大きな変容が見られたが、事前学習を十分に行うことで、生徒自身が達成感や満足感を感じたり、自己を見つめ直すきっかけとなったりした。今回の取組で得た成果と課題をもう一度整理し、これからも生徒が主体的に行動できるような工夫を行っていくことで、自ら進んで行動する力を身に付けられるようにしたい。

6 実践内容3（中学部3年部）

中学部3年部では、単元「喫茶店をしよう」を通して授業研究を行った。今年度3年部は2学級7名の生徒が在籍しており、1名は重複障害学級に在籍している。身辺自立しており、一人で会話などのコミュニケーションが成立する者や、教師や周囲の大人を介してコミュニケーションを取るものなど、生徒一人一人の実態は様々である。

単元設定の理由として、今年度1学期に3年生は現場実習を行い、その中で喫茶店での接客体験を行ったグループがあった。生徒たちは初めての体験で、うまく接客することはできなかったが、現場実習後にも「喫茶店をやってみたい。」という意見が多く聞かれ、学年全体で喫茶店を開店することにした。また、高等部への進学を控え、高等部での現場実習や卒業後の進路選択の幅を広げる意味でも、今回の喫茶店の開店は意味を持つと考えた。

喫茶店を経営することで、集団の中でそれぞれの役割を理解し、友達や教師と協力する姿勢を養うことと、生徒自身の興味・関心を高め、学習活動に自発的に参加する姿勢を養うことを狙いとした。また、生徒の実態に応じて目標や手立てを設定した。

生徒	目標	手立て
A、B、C	<ul style="list-style-type: none"> 自分で喫茶店の中でやりたい役割を決めて、目標を設定する。 身体を清潔に保つことを意識する。 大きな声で挨拶する。 	<ul style="list-style-type: none"> 写真や動画などで喫茶店の様子やメニュー等を紹介して、店に対するイメージを膨らませる。 店員の役割を紹介し、清潔さや挨拶の大切さを伝える。
D	<ul style="list-style-type: none"> 自分のやりたいことをまとめて目標を設定する。 身体を清潔に保つことを意識する。 状況に応じた声の大きさを挨拶や会話をする。 	<ul style="list-style-type: none"> 教師と話をすることで、生徒の気持ちを整理して、自分が本当にやりたいことを決めるよう促す。 動画や写真で店員の役割を紹介し、清潔さの大切さを伝える。また、どういうときに会話したり挨拶したりするのかを伝える。
E、F、G	<ul style="list-style-type: none"> 教師と一緒に、役割を決める。 身体を清潔に保つことを意識する。 	<ul style="list-style-type: none"> タブレット端末等、生徒の興味のある機器を使用し、自発的に活動するように促す。 教師と一緒に手洗い等を行なう。

授業内容・工夫点	授業の様子
----------	-------

<p>授業1「喫茶店を始めよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> 喫茶店についてどんなイメージがあるか発表する。 ※発表内容を板書して、視覚的な支援をする。 自分のイメージを絵にしてみる。 ※イメージにつながるような言葉掛けを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 喫茶店について生徒たちが持っているイメージは「食事をするところ。」「静かなところ。」「本や漫画がある。」「デートで行く。」など様々である。また中には実際に喫茶店に行ったことがある生徒がおり、どんな時に行ったか、何を注文したかなど店内の様子を発表することで、他の生徒ともイメージを共有することができた。 自分のイメージを絵にする作業では、好きなキャラクターやメニュー等を思い思いに描いていた。普段絵を描くのが苦手な生徒も店内の様子を細かく描いていた。
---	---



<p>授業2「喫茶店の準備をしよう」</p> <ul style="list-style-type: none"> それぞれの役割分担を話し合っ て決める。 	<ul style="list-style-type: none"> 喫茶店の中での役割分担をした。事前に喫茶店のイメージを膨らませていたので、それぞれやりたいことをたくさん発表し、接客や調理などの役割を決めていった。そのときの気分や雰囲気に流さ
--	--

- ※実際の喫茶店の写真を見せて、どんな仕事をする人がいるのか確認しながら、話し合う。
- ・自分たちの考えたカフェの広告を作る。
- ※広告の実物をいろいろ見せてイメージを広げたり、必要事項の確認を行ったりした。
- ・模擬カフェや高等部の先輩たちの指導を受けて、接客の練習をする。

- ・自分の気持ちを伝えることが難しい場面では、教師と話をし、気持ちを整理して役割を決めた。また、役割を決める中で、身体を清潔に保つことや、大きな声で挨拶することなど接客する上で必要なことを説明した。
- ・広告づくりでは、最初に実際の広告を用意し、広告に必要な項目を調べた。その後、メニューや値段、オープンする日時などを決定し、広告を制作した。また、文化祭展示用に大きなポスターを制作した。それぞれの得意なことを生かして飾り枠作りやコメントの記入などを行った。
- ・接客練習では1学期に現場実習で接客体験を行った生徒は、校内でも喫茶の練習をしたことがあったので、その時の写真を見ながら振り返りを行った。接客の練習では「平成26年度愛顔（えがお）のえひめ特別支援学校技能検定」の接客サービス部門のテキストを使い、基本的な所作を参考にした。テキストを使うことで生徒たちの意識も高まり、手順表を何度も見返したり、基本の姿勢や挨拶の練習を積極的に行ったりした。



(1) 成果と課題

生徒	成果と課題
A、B、C	<ul style="list-style-type: none"> ・苦手な活動にも積極的に取り組む場面が多く見られた。特に文化祭掲示用のポスター制作では、どのような店にしたいかを自分の気持ちをうまく表現して、コメントを書いた。 ・人前を出て話したり、発表したりするのが苦手であったが、喫茶店のイメージを自分の中に描き、好きなことと結び付けることで、積極的に活動する場面が増えた。 ・練習時間が短く、接客では不安な点が残る。 ・外出後や給食前など手洗いを自分からすることが増えた。
D	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と話しながら、気持ちを整理していくことで本当に自分がやりたいことを目標にして活動した。 ・場や状況を考えて話をしたり、声の量を調節したりするようになった。 ・ハンカチやティッシュを用意して使ったり、周りの友達に忘れ物がないか気遣ったりした。
E、F、G	<ul style="list-style-type: none"> ・教師と一緒に活動に参加することで、いろいろな活動を友達と一緒に経験した。また、教師と一緒に手洗いやうがいを行った。 ・タブレット端末に興味を持ち、挨拶などをタブレット端末で行った。

3年生は高等部への進学を控え、今年度高等部の生徒が受検した「平成26年度愛顔（えがお）のえひめ特別支援学校技能検定」の接客サービス部門の内容を参考にして研究を行った。高等部に進学したとき、集団の中で自分の役割を見つけ、意欲的に活動するためにも将来の活動を見据えた学習を行うことが必要である。また、サービス業の業務内容を知り、経験することは、卒業後の進路を考える際にも重要になる。

1月下旬には喫茶店を開店予定である。なかなか時間が取れず、練習時間が短かったが、生徒たちは喫茶店に興味を持ち、楽しく接客練習や広告作りに取り組んだ。喫茶店の準備の中で「喫茶店を成功させよう。」という気持ちを持って、自ら進んで活動することが将来の進路選択の幅やQOLの向上につながっていくものと考えている。

高等部 「キャリア教育の視点を生かした授業改善」

－ 授業改善の取組とキャリアトレーニング －

1 はじめに

高等部では、日々、卒業後の社会自立を目標に教育活動を展開している。これまで、授業の充実を目指して平成22・23年度には授業改善プロジェクトに取り組み、各教科や指導の形態ごとに指導内容表の作成等を行ってきた。個々の教科等での指導は充実してきたが、全体を通した縦断的、横断的な軸も必要であると考え、その一つとして、平成24年度から、キャリア教育の視点を取り入れ、それを生かした授業改善の実践に取り組むことにした。授業改善プロジェクトで培った教科ごとの取組を広げていきながら、キャリア教育について、共通理解を図り、実践した3年間の取組をまとめて報告する。

2 目的

- (1) キャリア教育についての理解を深める。
- (2) キャリア教育の視点を生かした授業改善を行う。
- (3) キャリア教育の視点から従来の教育活動を見直し、改善の方向性を見出す。

3 各年度での取組の概要

(1) 1年次の取組（平成24年度）

高等部全体で、各自の授業において「授業における観点位置付け・授業改善シート（国立特別支援教育総合研究所）」（以下、授業改善シート）を使った授業研究を行い、協議することを通して、キャリア教育の理解を深めた。

ア 実践例(1) 授業研究でのシートの活用例

(ア) 「授業改善シート」の作成

キャリア教育の視点を意識して授業の題材や狙いを定め、授業を構築する。

(イ) 視点を明確にした授業参観

a 「気付き」の記入に重点を置くことで、他教科等との関連付けを図る。

b 授業研究会では、「生徒の活動の様子」「教師の姿勢」「授業展開の工夫」「環境設定の工夫」「次時授業改善点等、気付きについて」の視点から、メモを取り、これを基に、協議し、意見交換の活性化を図る。

学習内容・教材		授業の目標	授業の展開	指導者の役割	気付き
1 最近のニュースの中から興味を持ったものを発表する。	① 授業について学習することを知る。	② 気付きの記入	③ 必要となる資料などについて	④ 学習内容をまとめる。	
2 授業について学習することを知る。	① 興味を持って事前に調べた内容を発表する。	② 気付きの記入	③ 必要となる資料などについて	④ 学習内容をまとめる。	
3 気付きの記入	① 興味を持って事前に調べた内容を発表する。	② 気付きの記入	③ 必要となる資料などについて	④ 学習内容をまとめる。	

図1 授業改善シート（産業科社会）

(ウ) 焦点を絞った協議（実際に出された意見、協議事項の抜粋）

- a 次時の授業改善点では、個に応じた課題設定、身近で具体的な教材の準備、指導の継続性の重要性などが指摘された。
- b 教育課程への反映として、指導内容の重複を避けた効率化、指導の一貫性、校外学習など具体的活動で般化を図る必要性などが協議された。
- c 生活全般への反映として、家庭との連携、卒業後の生活に対するイメージの育成を図ることなどが協議された。

(エ) まとめと課題（1年次）

キャリア教育の視点の授業実践を通して、教科によっては、観点の明確化が難しいという意見などがあったものの、指導案の作成を通して、「キャリア教育の視点（4領域8能力）の確認ができた。」「キャリア教育は、特別なことではないと感じることができた。」など、これまでの取組を振り返る良いきっかけであったと、肯定的に捉えられた意見が多かったことは成果である。

課題としては、キャリア教育について理解を深めるために、ワークショップ形式の意見交換などの研修や授業研究会の持ち方（事前審議や観点の絞り込み）の工夫改善の必要性、高等部普通科、産業科の違いに応じた実践上の課題の有無、教科の特性に合った活用方法、教科間・学級担任と教科担当者間の連携、具体的な資格取得など、分かりやすい目標設定の必要性なども指摘された。

(2) 2年次の取組（平成25年度）

1年次の取組を基に、2年次には生活単元学習を中心にして「単元における観点別シート」（以下、「観点別シート」）の作成を通して高等部の授業におけるキャリア教育の観点を分類し、明らかにすることとした。また、最近の進路状況の変化（製造業からサービス業などへ）などを考慮し、新しい作業学習（種目）の開発に取り組む足掛かりとして「キャリアトレーニング」の授業に取り組んだ。

図2 観点別シート

ア 「単元における観点位置付けシート」（「生活単元学習」における分析）

各クラスの生活単元学習年間指導計画から「単元における観点位置付けシート」を作成した。

【結果と課題】

学科、学年ごとに観点を集計し、まとめたものが表1である。

(ア) 「主たる観点」は、全体（図3）では「人間関係形成能力」が最も多く、次いで「意思決定能力」「情報活用能力」「将来設計能力」であった。

		主たる観点				関連する観点			
		人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力	人間関係形成能力	情報活用能力	将来設計能力	意思決定能力
高等部全体		45	17	15	23	35	16	19	30
普通科	1年	27	25	17	31	39	14	19	27
	2年	33	20	25	21	35	13	18	34
	3年	48	20	7	24	34	21	22	23
	計	36	22	17	26	36	16	20	28
産業科	1年	65	8	11	16	37	8	19	37
	2年	44	18	23	15	27	24	15	34
	3年	56	11	4	30	38	14	20	28
	計	54	13	13	20	35	15	18	32

表1 「生活単元学習」における観点のまとめ（表中の数値は%）

産業科と普通科を比較すると、産業科の「人間関係形成能力」の割合が大きく、これは、産業科では、「人間関係の形成」が課題とされるため、授業の狙いに設定されたと考えられる。

(イ) 「関連する観点」でも、全体（図4）は「主たる観点」とほぼ同様の傾向が、「人間関係形成能力」が、「主たる観点」ほど大きな割合ではない。

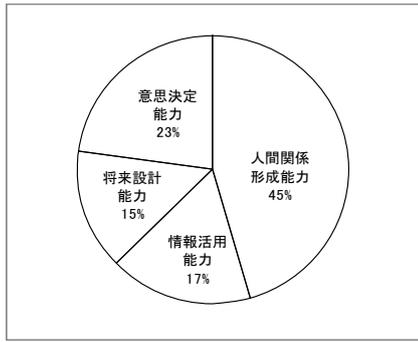


図3 主たる観点（全体）

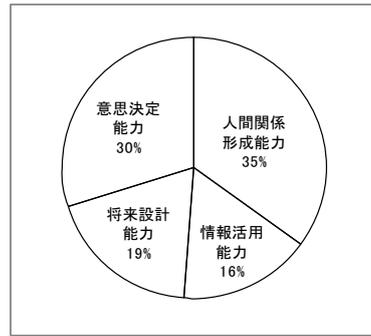


図4 関連する観点（全体）

(ウ) 先行研究（キャリア教育ガイドブック記載の研究）とは、分析した教科や学科（類型）等の違いがあるが、関連のある部分を比較した。

同様の結果であったのは、各教科等を合わせた指導を中心とした教育課程（普通科に該当）では、「人間関係形成能力」の割合が高いこと。異なる結果となったのは、教科別の指導を中心とした教育課程（産業科に該当）では、「情報活用能力」の割合が高い傾向にあるとされているが、本校の結果では、むしろ、産業科の方が「人間関係形成能力」の割合が高かったことである。

これは、「生活単元学習」を分析したためと考えられる。

(エ) 今後の課題としては、作業量は増えるが、他の教科や指導形態でも分析を行い、更に詳しい傾向を明らかにすること。また、観点の捉え方を精査し、分析の精度を上げる工夫が必要であることである。

イ キャリアトレーニングの取組

(ア) 取組の経緯

これまでの作業学習の種目（園芸、陶芸、縫製、木工等）は、最近の労働環境、進路状況の変化（店舗での商品管理や介護サービス補助等の希望や需要）に対応し切れていない現状にある。進路状況等は、常に変化するものであり、対症療法的に対応することが、一概に良いとも言えず、どのような作業種目であれ、その中で就職につながる基本的な作業能力（集中力や持続力、コミュニケーション能力など）を培うことができると考えてはいるが、やはり現代的なニーズに応えることも必要である。そこで、他校の取組も参考にしながら、「清掃」「福祉」「食品加工」「サービス」の分野で授業実践を行うことにした。

(イ) 実施方法

- a 対象：産業科1～3年生徒（後半からは、一部普通科生徒も参加）を希望等から、4班に編制した。
- b 実施回数及び内容：年間8回の実施を計画し、その内、2回は就労支援アドバイザー活用事業と関連付け、実際の事業所から外部講師を招き、アドバイス（生徒及び教師）を受けたり、事業所（食品工場や福祉施設）を訪問し、現場での見学や実習を行ったりした。その他の回の授業は、アドバイスを基に教師が指導した。

(ウ) 授業の実際

 <p>【清掃班】</p>	<p>清掃会社のアドバイザーから、トイレ掃除や窓拭き等の技術、清掃するものの心構えを教わった。</p>	 <p>【サービス班】</p>	<p>金融機関のアドバイザーから、接客の基礎（分離礼等）を教わり、互いに練習した。</p>
 <p>【福祉班】</p>	<p>施設訪問し、車椅子の操作を学んだり、校内で食事介助などの演習を行ったりした。</p>	 <p>【食品加工班】</p>	<p>食品加工場で缶詰製造を行った。校内では、浅漬けを作り衛生管理を学んだ。</p>

(エ) 結果

産業現場のアドバイザーとの協働となったキャリアトレーニングの授業で得られた成果は、それぞれの立場にとって有意義なものとなった。生徒にとっては、アドバイザーから現場の生の声を聞いたり、実際の技術を習得できたりしたことで、仕事の厳しさややりがいを強く感じ、また、現場実習等にも応用できる実践的な力を身に付けることができた。教師は、アドバイスを受けることで指導教材を充実でき、また、仕事の厳しさをアドバイザーから伝えられたことで、教師の意見を生徒が素直に受け入れるようになったなど、学校での指導がスムーズになる効果もあった。事業所にとっても、生徒の真剣に作業に打ち込む姿を見ていただいたことで、障害者理解や雇用を考えてもらえるきっかけを提供することができた。

ウ まとめと課題（2年次）

2年次には、一つは、生活単元学習に焦点を当て、本文中では省略したが、昨年度に引き続き、「授業改善シート」で研究授業を行い、キャリア教育の視点から協議を行った。学年でのまとまりを重視し、生徒や学習集団の実態がつかみやすく、協議も深まったが、部全体の共通理解につながりにくかった。「観点位置付けシート」の分析からは、「人間関係形成能力」が多かった。それは、教師が生徒たちの課題として捉えているからではないかと考察した。さらに、高等部では、職業教育を改めて考えながら「キャリアトレーニング」の授業に取り組み、今日的な職種・作業種目を考える上で、大きく参考となったが、教育課程への位置付けや整理、客観的な評価の在り方が今後の課題となった。

(3) 3年次の取組（平成26年度）

3年次は、今年度から始まった「愛顔（えがお）のえひめ特別支援学校技能検定」（以下、技能検定）に取り組むことで2年次に取り組んだ「キャリアトレー

ニング」の内容を深め、さらに、普通科でも技能検定の考えを生かしながら、生徒たちの自立やキャリアの深まりを期待して取組を進めることにした。

ア 産業科「キャリアトレーニング」での取組

(ア) 技能検定に向けて

技能検定は、今年度、愛媛県が始めた事業で、障害のある生徒の社会参加自立につながる力の育成を目指して、「清掃」「接客」「販売実務」の3部門6種目（第2回は8種目）について、実技を行い、外部専門家による客観的な評価から、該当する級が認定されるものである。

高等部では、昨年のキャリアトレーニングの取組において、その教育効果を感じつつも、客観的な評価に、課題が残されていた。このことを解決する一つの格好の機会として、この技能検定に積極的に取り組み参加することにした。

(イ) 実施方法

- a 対象：産業科1・2年（後半から、普通科生徒も一部参加）。生徒が部門や種目を希望し、進路希望や適性を考慮して、各班を編制した。
- b 実施回数及び内容：年間13回の実施を計画し、技能検定テキストに基づいて教師が指導する。その内、2回程度、アドバイザー活用事業と関連付け、外部講師から生徒、教師共々、アドバイスを受ける。また、夏季休業中に1回、検定前の放課後等、希望や必要に応じて補習も実施した。
- c 評価：毎回、実技後、教師が評価表でチェックし、級を判定した。また、タブレット端末に録画した映像を確認しながら技術を身に付けた。



写真1 授業の様子



写真2 補習



写真3 振り返り

(a) 第1回検定

「キャリアトレーニング」の授業を受けている生徒は、32名であるが、校内で基準を設けて選考し、8月1日に実施された第1回検定には、清掃部門8名、接客部門3名、販売実務4名の計15名が参加した。県下の特別支援学校生徒延べ73名が検定を受け、真剣な雰囲気の中、緊張しながら、それぞれが練習の



写真4 検定の様子

成果を発揮した。結果は1級2名、2級5名、3級3名、4級1名、5級2名、6級1名、級外1名（基本項目＜身だしなみ＞にチェックが入り、対象外となった。）であった。客観的な評価を求めたこともあり、何級であったかは重要である。しかし、それだけに意義があるわけではなく、結果を受け止めて、自分の力を冷静に認められるか。次にどう生かせるかがより大切な視点であった。その中で、受検後の生徒の声に「自分が今まで練習してきて、どのくらいできるかが分かりました。2

級だったけれど、今回自分ができていないところを練習して、次は1級が取れるように頑張りたいです。」と意欲の向上を示す発言があり、これまでの取組が実を結んだことを感じた。保護者からは、「受検後は、就職に対する意識の向上が見られるようになった。」「普段味わうことのない緊張感の中、身に付けたものを発表し評価してもらう。本人にとって素晴らしい体験だった。」など、好評価する声が挙がった。また、教師からは「テキストを読み込むことで、教材研究が出来、評価の観点や指導内容を的確に把握して授業を進めることができた。」など、授業改善、指導の充実を実感している意見があった。

(b) 第2回技能検定

第2回技能検定に向けて、再度生徒の希望や適性から新たに班編制を行い、授業に取り組んだ。更に同じ種目で上の級を目指そうとする生徒、「別の技術を身に付けたい。」と部門の変更を希望する生徒と様々であった。教師も技能検定の実際を経験したことで、適性にあった部門・種目を生徒にアドバイスすることができ、それぞれの部門や種目を選定し、授業を進めた。授業時数は限られていたが、昼休みや放課後の練習を自主的に希望するなど、意欲的・主体的に取り組む生徒の姿が見られるようになった。そして、第1回同様、技能検定を受ける生徒を校内で選考し、12月25日の第2回技能検定には清掃部門15名（複数受検の生徒がいるため、延べ人数）、接客部門4名、販売実務7名が参加した。結果は、1級5名、2級6名、3級6名、4級4名、5級4名、6級1名であった。同種目を受検した生徒は、ほとんど上級の結果を得た。しかし、受検環境や本人の調子などに左右はされたのであろうが、数名は前回と同等であったり下の級になったりした生徒もおり、今後の対応を考える必要を感じた。



写真5 検定の様子（販売実務）

(ウ) 技能検定を終えて

手探りで始めた取組であったが、2回の技能検定を終え、生徒も教師もそれぞれ手応えを感じてきている。既に触れたように結果が全てではなく、生徒にとっては、明確な目標を持ち努力することの意義、教師にとっては、指導のステップを細かく把握して、授業を進めることのできる充実感を得たことは大きな成果であった。

イ 普通科における取組について

普通科では、社会参加や自立に向けて、日頃から取り組み、家庭でも生かすことができ、卒業後の就労にもつながる内容として「清掃」を捉え、学年ごとに取り組むことにした。まず、清掃に関して日頃から感じていることについて意見を出し合ったが、掃除道具の適切な使い方が分かっていなかったり、良い手順を分かっていなかったりする生徒がいることが挙げられた。同時に、教師サイドも適切な手順などの指導が十分行えていないことが確認された。また、清掃の手順を伝えるとそれを理解し継続して取り組む効果が見られる生徒もいる一方で、なかなか指示の通らない生徒にどう指導するかが悩みであることも

挙げられた。そこで、日頃の清掃を見直し、技能検定の清掃テキストから普通科生徒に取り入れられそうな部分を整理し、どのような取組方で生徒への指導が可能か検討していくことにした。

(ア) 指導目標・内容

指導目標・内容	
1年	<ul style="list-style-type: none"> 主体的に清掃活動を行う。 正しい清掃の方法を理解する。
2・3年	<ul style="list-style-type: none"> 道具を適切に扱う。 → きれいに掃除を行う。 手順を考えて取り組む。 身に付けた技術を生かす。 学校に対する感謝の気持ちで取り組む。 → 卒業前に教室や学校をきれいにする。 任されたことを最後までやり抜く。 友達と協力して取り組む。 挨拶や身だしなみ、ほう(報告)れん(連絡)そう(相談)について、普段から意識して取り組む。

(イ) 方法

清掃時間内だけでは、十分な指導の時間が確保できにくいことから、手順や評価など、細かく確認するために、生活単元学習の時間でも実践した。また、いろいろな能力の生徒を一斉に指導することは難しく、どの学年も実態に応じてグループを編成して取り組んだ。

(ウ) 指導の実際・結果

取組	
1年 (写真6)	(クラス) <ul style="list-style-type: none"> 主体的に清掃に取り組むための、掃除用具入れの整理、工夫をした。 清掃当番表を作成し、一人一人の仕事を明確にするとともに、各清掃場所に ほどの道具が必要であることを生徒自ら確認するようにした。 (グループ) <ul style="list-style-type: none"> 自在ぼうきの持ち方、掃除の手順等の見本を示すなど、清掃活動の基本を指導した。
2年 (写真7)	(クラス) <ul style="list-style-type: none"> 自在ぼうきの使い方や雑巾の使い方などの指導をした。 (グループ) <ul style="list-style-type: none"> 掃く方向、移動させた物を確実に元の場所に戻す。雑巾の絞り方に気を付け隙間なく拭くなどの清掃のポイントについて指導した。
3年 (写真8)	(グループ) <ul style="list-style-type: none"> 準備について、道具の扱い方、掃除に取り組む手順、片付け等についての指導をした。廊下掃き、窓拭き、雑巾の絞り方、机拭きの方法を学習した。



写真6 整理された掃除用具



写真7 自在ぼうき



写真8 机拭き

授業の中で実技を練習するだけでなく、学習したことを日々の清掃活動で意識して取り組むよう、技能検定の評価表を基にチェックシートを作成し、活用した学年もあった。2年生は、清掃だけではなく身だしなみの大切さを意識する内容も含め、毎月1回チェックシートで確認を行っていった。また、

産業科生徒のキャリアトレーニングの様子を見学する時間を設け、意欲の向上につなげた。3年生は、清掃の手順をシートにして、視覚的に捉えやすいように配慮した。これまでの習慣を変更しにくい生徒もいることから、雑巾の絞り方は基本の縦しぼりでなくても水気をしっかりと切ることを意識しているか、水がこぼれた際には拭き取っているかなど、技術だけではなく、その行動の意味を理解して行っているかを評価するよう考えた。



写真9 授業見学

生徒たちはグループ学習を生かして、日々の清掃活動に取り組んだ。雑巾や自在ぼうきの使い方や段取りが少しずつ上手になり、また、清掃時間だけでなく、給食の準備や片付け、クラスでの制作活動の片付け、作業学習での片付けなど、様々な場面で習ったことを実践している様子が見られるようになった。そして、毎月チェックをすることで自分ができていない点が明確になり、より意識して日常生活や清掃に生かして取り組む生徒も出てくるようになった。

今回の取組では、技能検定テキストを一部活用して、生徒に清掃の取組方の基準を示すとともに、教師間での意識統一ができた。取組方そのものだけではなく意味を説明することで別の場面に応用できる生徒もおり、これからの生活に生かされていくことが予感される。

基本を身に付けることで自信が付き、意欲となり、積極的な態度につながっていく。清掃を通して、仲間に意思を伝えたり協力して取り組んだりすることや、清掃を任されたその場所を利用する相手のことを考え、気持ち良く使えるよう思いやり、気を配るなど、気持ちの面でも育っていくよう、引き続き取り組んでいきたい。

ウ まとめと課題（3年次）

技能検定という機会を得て、「キャリアトレーニング」の授業では、就労を目指して具体的な技術や心構えを習得し、生徒たちが授業に主体的に取り組むようになった。また、教師が同じ観点で、テキストから学び、普通科の普段の生活の中にもそのエッセンスを取り入れることで、同じように技術や心構えが身に付いていき、高等部全体の取組として根付いていったことは大きな成果であった。今後の課題として、まだまだ技能検定が一部の生徒のためのものとして認知されていることがある。今年も取り組んだように、高等部全体に、内容を広めて行き、授業に、また、生徒の卒業後の生活につながる取組として進めていきたい。

4 おわりに

3年にわたりキャリア教育を視点に教育実践を積み重ねてきた。この取組を通して、社会自立直前の高等部で、自立に焦点を当てた授業の展開が図れたことや、それぞれの教師が、日々の授業を振り返りながら、指導内容や評価を考えてきたこと、また、技能検定という格好の機会を得て、より実践的に社会に役立つスキルや評価を考えることができたことは、大きな成果であった。一方、本来であれば「単元別シート」の作成も全教科、指導形態でなされるべきであったし、キャリアトレーニ

ングの取組も技能検定に特化せず、2年次に取り組んだ他の職種への対応も必要であった。いずれは、必要とされる他の職種に関しても本校なりのテキスト作りに至れるよう今後の取組としていきたい。いずれにせよ、年々、多様化するニーズに対応しようとしてきたあまり、当初の目的であった教育活動の軸としてキャリア教育の視点で整理するという方向性がやや弱まってしまったようである。3年間の取組を振り返り、今後、改めて各年度の課題を一つずつ解決していきたい。

【参考文献】

- (1) 国立特別支援教育総合研究所 編著 2011 特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック ジアース教育新社
- (2) 尾崎祐三・菊地一文 監修 2013 知的障害特別支援学校のキャリア教育の手引き ―小中高の系統性のある実践― ジアース教育新社
- (3) 菊地一文 編著 2013 実践キャリア教育の教科書 学研教育出版

訪問教育 人間関係形成能力を育てる授業実践

1 はじめに

平成24年度からキャリア教育の視点を生かした授業改善を行ってきた。「授業における観点位置付け・授業改善シート」を作成して授業を行い、話し合いを重ねた。平成24年度は、キャリア教育の視点で授業を行うことで様々な気づきがあった。平成25年度は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所が示した知的障害のある児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」の4能力領域で訪問教育の児童生徒が育てたい力を検討することや、卒業後の生活を見据えつつ、学校生活が充実したものとなるよう、様々な経験をするなどが話し合われた。

今年度は、「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」の4能力領域の「人間関係形成能力」に焦点を当てた授業実践をし、研究を行うことにした。

「人間関係形成能力」の内容は、「他者の個性を尊重し、自己の個性を発揮しながら様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組むこと」であることと、その観点として、人との関わり（自己理解・他者理解）、集団参加（協力・共同）、意思表示、挨拶・清潔・身だしなみ（場に応じた言動）が挙げられている。前回の研究紀要で、訪問教育は「豊かな生活」を送るために必要な「生きる力」として「コミュニケーション力」を取り上げ、「意思表示ができるものを持っていることで、人との関係が広がってくるのではないか」と考え、今回と同様のテーマで研究を行ってきた。日常生活においてより多くの支援を必要とする訪問教育の児童生徒たちが、「様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む」ことが大切であると考え、人間関係形成能力を育てることを目指した授業に取り組んだ。

2 目的

- (1) 訪問教育の児童生徒にとってのキャリア教育を考える。
- (2) 人間関係形成能力を育成する授業を研究する。
- (3) 授業研究を通して、訪問教育担当者間における訪問教育児童生徒の共通理解を深める。

3 方法

- (1) 人間関係形成能力について話し合い、共通理解を図る。
- (2) 人間関係形成能力に焦点を当てた授業を実践する。
- (3) 作成した「授業における観点位置付け・授業改善シート」や授業のビデオを視聴して、授業研究を行う。

4 実践内容

(1) 授業実践

各担任が対象児童生徒を決め、「授業における観点位置付け・授業改善シート」を作成し、授業を行った。その様子をビデオで撮影した。下の表は、授業事例の一覧である。授業研究を行った順に並べた。

授業事例	部	教科名等	題材名	観点
1	中	生活単元学習	1学期を振り返って	意思表示、人との関わり
2	小	遊びの指導	風船で遊ぼう	人との関わり
3	高	日常生活の指導	始めの会	自己理解・他者理解、意思表示
4	小	日常生活の指導	始めの会	人との関わり、意思表示

(2) 授業研究

事例ごとに、授業の様子と話し合ったことを記載した。

ア 授業事例 1

生徒は、「はい。」「いいえ。」で答える問い掛けに、肯定は大きく声を出し「はい。」と明瞭に聞こえることもある。反対に黙っているときには否定と捉えて関わるようにしている。発音が不明瞭なので、担任が聞き取れないことも多いが、意図的に言葉を発することがある。そこで、意思表示を主観点として、アルバムを見てから、楽しかったことを発表するなど、発声する機会を多く設定した授業を行った。担任が言葉を聞き取ると、うれしそうに笑った。

小6のときより、意思表示がはっきりとしてきた。学校での母親と生徒との関わりの様子からも、コミュニケーションが取れており、表出の力があると分かった。今後は、本人の意思表示の意欲を大切にしながら、表現する機会を多く持ち、他者に分かりやすいコミュニケーション手段を考えていきたい。

イ 授業事例 2

児童は、教師の働き掛けに微弱な反応を示すことが多く、自ら働き掛けることもほとんどないので、表情に留意して笑顔が見られるような楽しい遊びを心掛けていた。また、視覚の活用が難しいため、聴覚と触覚に働き掛ける教材を工夫している。授業では、教師が「ポンポンポン。」と言いながら、鈴の付いた風船で体に触れると笑顔になった。手の平に絵の具を塗ると手を引っ込めたので、嫌な感触だったと思うが、それ以外は反応が分かりにくい。訪問教育では、子どもと教師がマンツーマンで授業を行っており、環境も限られている。人との関わりが広がるように、体調の良いときは、対象児童の授業時間と重なっている、同じ病院に入院している中学部の生徒と一緒に活動することを検討したい。

ウ 授業事例 3

生徒は、タブレット端末を提示すると、画面に喜んで手を伸ばしてくるので、タブレット端末を使った活動を授業に取り入れている。始めの会では、出席確認でクラスメイトの写真と一緒に並べた自分の写真にタッチすると、自分のテーマ曲が聞こえてくる。左ききなので、左手側に本人の写真を提示し、自分の写真を選びやすくした。2学期から始めた活動であるが、積極的に取り組んでいる。

タブレット端末の活動をする以前には、呼名して発声か教師の手にタッチすることで返事を確認していた。自分のテーマ曲と一緒に写真を提示して、関連付ける活動を繰り返してから選ぶ活動に取り組んだ。写真や並び順を変えて様

子を見たい。訪問教育では、クラスメイトを意識することが少ないので、クラスメイトの写真を見て、自分の写真を選ぶことは良い活動だと思った。まずは写真カードで取り組んでみたい。

エ 授業事例 4

児童は、提示したものを追視したり手を伸ばして取ったりすることがある。始めの会では、カードや具体物を提示して、本人が弾きたい曲やペンの色などを選択してそれを取る活動をしている。授業を楽しみにしており、担任がベッドの下で次の準備をしていると、側臥位になってのぞきこむことがある。

授業研究の場において、色の選択は、教師がマジックペンを提示したらすぐ取っていたので、カードを提示しなくてもいいのではないかという質問が出た。保護者が「赤はトマトの赤」というように物と色とをつなげてほしいとのことなので、カードを利用している。ただ、児童の意思を確実に確かめたいという担任の思いから、確認の方法がくどくなってしまうている。意思表示の確認に時間を掛ける項目を決めて、それ以外はさらりと流すようにしたら良いのではないか。ときどき、言葉らしい発声があるので、それを捉えて褒め、さらに言葉に近付けていきたい。発声があったり物を取ったりして意思表示ができるので、本人が確実に思って意思を表しているかどうかを確かめながら、意思表示をさらに促していきたい。

(3) 授業研究後の取組

授業の観点として挙げられていた「人との関わり」と「意思表示」の取組をまとめしてみた。

ア 人との関わり

事例2の児童は入所しているが、体調管理のために集団の場にいることが少ない。人との関わりを広げるために、体調が良いときには散歩する前に病棟の人たちに挨拶をしたり、クリスマスのサンタの衣装を着てお披露目をしたりして、関わる機会を増やしている。中学部生徒との合同の活動はまだ実施できていない。

事例3では、毎回の授業で活動することで、自分の写真を選ぶ確率は上がってきた。しかし、写真を選ぶ活動に飽きてきているので、再び積極的に取り組めるような工夫を考えている。

授業研修で検討したこれらの事例を参考にして、他の児童についても、児童が提示した友達と自分の写真の中から自分の写真を選ぶ活動を実施した。最初に鏡で自分の顔を意識させてから、選ぶ活動に移っている。今まで、鏡を見る経験がなかったからか、鏡に映った自分の顔をあまり見ようとしなない。明確に自分の写真を選んでいるとは思えないが、本人を意識させることにはなっている。人と関わる上で、自分を知ることは大切なことなので、この活動は続けていくと良いと思われる。

イ 意思表示

事例1の生徒は、今年度以前より発声で号令を掛けたり天気を答えたりしていたので、その積み重ねによってその場面で使う言葉として聞き取りやすさを増してきている。例えば、自分の要求を「早く。」で伝えている。生徒の様子を見て、教師は、よだれが出たときは「拭いて。」、排せつの処置のときは「出た。」と捉えて、言葉でフィードバックすることにした。模倣を促してい

るが、自分から発することはない。模倣の音声は誰が聞いても「拭いて。」
「出た。」と聞こえるものではないが、区別は付くように思われる。模倣した
ときに褒めながら、より聞き取りやすくなるように繰り返していきたい。

事例4の児童は、曲選びなどの活動ではカードを取って意思表示をしている。
担任が持っているカードを取るが、ホワイトボードに貼って提示すると取ろ
うとしない。手の操作性を高めてほしいという保護者の希望もあって、児童が
取りやすいようなカードを工夫して実践中である。児童にとって、意思表示の
必然性があり、思いが通じた喜びが感じられるような選択場面の設定を検討し
ている。

5 成果と課題

(1) 訪問教育の児童生徒にとってのキャリア教育

この3年間、キャリア教育の視点で授業改善に取り組んできた。知的障害のあ
る児童生徒の「キャリアプランニング・マトリックス（試案）」などを参考にし
ながら、シートを作成し授業を行ってきた。訪問教育に在籍している障害の重い
子どもにとってのキャリア教育とはなんだろうと、頭の中は疑問で一杯ながらも
手探りで取り組んできた。

筑波大学附属久里浜特別支援学校の下山校長が、「肢体不自由児教育における
キャリア教育」の中で「例えば、コミュニケーションの場面では、教師の働き掛
けに対して子どもが相手に返すという役割を担います。障害の重い子どもは教師
の働き掛けに対して返す力が弱いので、なかなか役割を担っているようには見え
ませんが、反応を返す子どもの役割なくしては、教師の役割は成り立ちません。
（中略）二者の関係において、障害の重い子どもが役割を果たしているのです。」
と書かれている。このように考えると、キャリア教育を捉えやすくなった。今ま
でも行っていたが、授業や集団学習の場で、号令を掛けるなど役割を担う機会を
増やした。役割を果たした子どもの活動が周囲に受け止められ「ありがとう」と
言われる経験を積み重ねて、達成感や意欲を育てていくことが、訪問教育の児童
生徒にとってのキャリア教育ではないだろうか。今後は、先進校の取組などを参
考にしながら、話し合いを重ね考えていきたい。

(2) 人間関係形成能力を育成する授業

本校訪問教育に在籍している児童生徒は、日常生活で多くの支援を必要とする
障害の重い子どもであるので、人との関わりをより多く持つことになる。しかし、
人との関わり状況（頻度、人数など）は子どもの家庭環境によって様々で、在
宅か入所か、在宅でも通園施設などを利用するかしないか、によっても異なる。
また、人との関わり方も、担任など他者からの働き掛けを受け入れるが、反応は
微弱で自分から働き掛けることはほとんどない子どもから、親しい人に対して呼
び掛けるように声を出したり近寄っていったりして自分から他者に働き掛ける子
どもまで、様々である。

今回の授業実践では、毎回の授業で行う始めの会で、クラスメイトの写真と一
緒に提示された自分の写真を選ぶ活動があった。子どもと担任の一对一の活動が
多い訪問教育で、友達の写真を見ることは、友達、他者の存在を意識すること
につながっていくであろう。また事例3から人と関わる自分を知る活動に広がっ
ていった。自分の顔を鏡で見て自分の写真を選ぶことは、自分を知る手掛かりにな

るであろう。視覚の活用が難しい子どもも含めて、支援を受けながら自分の手で自分の顔や体に触れることも有効ではないだろうか。

障害の重い子どもは、自分の意思を言葉で伝えることはできないが、快・不快を表情や体の動きで表現したり、提示した絵本を見て視線や発声で選択したり、問い掛けに声や行動で応じたりすることで、自分の意思表示をしている。その意思表示を受け止めて認め、評価することを繰り返すことで、やがては他者に伝わりやすいコミュニケーションの手段になっていくことが分かった。タブレット端末を利用して、写真を選ぶと自分の曲が流れることで自分の写真を選ぶ確率が上がっていった。

選択することは意思表示の場であるが、児童生徒にとって必然性のあるものになっているか、思いが通じた喜びを感じられるものになっているか、疑問に思うこともある。絵本の選択のように「これを聞きたい。」という強い動機付けがないと、意欲につながらず、達成感が感じられないのではないかと思う。意欲につながる選択場面の設定が今後の課題である。

(3) 訪問教育児童生徒の共通理解

授業のビデオを視聴し、話合いをすることで、担当以外の児童生徒の様子や集団活動の場では見られない一面を知る機会を得ることができた。

将来というと高等部卒業後のことを考えるが、進級や進学でも担任を含めた環境は変化することがある。個別の教育支援計画、個別の指導計画や保護者などの支援者から情報を得ることが重要ではあるが、担任以外の教師がその子どもの支援の仕方や配慮事項を知っていることも必要なのではないか。訪問教育の行事に参加できない児童生徒は、訪問教育担当者が複数で訪問することも共通理解に役立つのではないだろうか。来年度の肢体不自由部門の開設により、訪問教育の児童生徒は減少することが予想される。今までの行事の持ち方を検討し、人間関係形成としての集団活動の場の確保を工夫していく必要がある。

参考文献

「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著 平成23年 (ジアース教育新社)

「障害の重い子どもの授業づくり Part 5」飯野順子編著 平成25年 (ジアース教育新社)

寄宿舎 人との関わり方を良くするためのエチケット・マナー

1 はじめに

本校寄宿舎では、男子36名、女子17名の児童生徒が在籍している。

最近、障害の多様化が進んでおり、友達と仲良くしたいという気持ちはあるが、うまくコミュニケーションが取れないなどの対人関係面での課題も増えている。人との関わり方やエチケット・マナーを身に付けることは、集団生活を送り自立を目指す児童生徒たちにとって重要である。本校では、平成22年度から、「人との関わりを良くするためのエチケット・マナー」をテーマとした研修を進めている。生徒を対象とした全体の学習会を年2回行い、各棟でも児童生徒の具体的な問題点を取り上げた学習会を実施している。学習会を行うことで、児童生徒もコミュニケーションの取り方が少しずつ身に付いてきている。エチケット・マナーや対人スキルを身に付け、自信を持って人と関われることを目指した取組について発表する。

2 平成25年度の取組

南上棟（女子棟）では8名の児童生徒を対象として、その実態に応じた学習会を年2回実施し、学習会後にはその内容を掲示し、意識付けを図るという取組を行った。学習会に参加しない生徒については、基本的な生活習慣の確立を目指しながら、社会生活をする上で最低限身に付けておかなければならないルールやマナー、エチケットについて日々の生活の中で場面を捉え支援した。

1学期の生徒の実態から、「相手の立場を考えた行動や言葉遣いができにくい。」「整理整頓ができにくい。」の課題が挙げられた。2学期からの重点目標を「整理整頓をする。」「ルールを守る。」「相手のことを考えて行動する。」の三つに絞り、児童生徒に伝えた。朝の健康観察や夜の点呼を利用して、寄宿舎生活で大切なルールやマナー等について、その時々で気が付いた点について話を行った。

(1) 学習会の内容（対象者：中学部・高等部生徒8名）

ア 1学期「エチケット・マナーについて」

(ア) 挨拶

日常で使う挨拶にはどのようなものがあるかを考え、挨拶はコミュニケーションの基本であり、人との関わりを良くするために大切なことであることを知る。挨拶をする上で気を付けることについて、具体的な事例を示し、気持ちの良い挨拶の仕方や態度について確認する。

(イ) 服装・身だしなみ

服装や身だしなみについて自己チェックし、日頃習慣化して自分では気付きにくい面を知る。相手に良い印象を与えられるような服装や身だしなみについて話し合い、その留意点について一緒に考える。

(ウ) 友達との話し方・関わり方

友達と話すときに気を付けていることについて意見を出し合い、言葉遣いや聞く態度について確認する。

集団での行動やルール理解、集団における気持ちのコントロールについて学び、理解を深める。

イ 2学期 重点目標「整理整頓をする。」「ルールを守る。」「相手のことを考えて行動する。」に関する学習

(ア) 1学期に行った学習会の内容を再確認しながら、具体的事例を挙げ、個々の意識を高める。

(イ) 寄宿舎でできていても、家庭では生活が乱れてしまうケースが多い。日頃から生活のリズムを作っていくことが大切であることを話し、規則正しい生活をすることの重要性を伝える。

(2) まとめ

友達との関わり方については、相手の気持ちを思いやることができず、自分の感情や思いをストレートに表現したり、自分勝手な行動を取ったりしたことで、対人関係がうまくいかないこともあったが、その都度場面を捉え、1年を通して根気強く支援を続けてきた。

自分の言動を振り返って反省し、改善しようとする態度も見られるようになったが、まだまだ指導を要する場面もあり、継続して支援を行うことにした。集団生活をする上での、寄宿舎の決まりや交流の決まり、単独帰省の決まりなどがあることを知らせていった。服装や身だしなみについても、最初は無頓着で服や髪の乱れをあまり気にする様子は見られなかったが、場面を捉え、その都度話をし、学習会を通して意識付けを図った。整理整頓では、机の上や衣装ケースの中の片付け方を教え、一緒に確認しながら言葉掛けや支援をした。その結果、少しずつではあるが、エチケット面や清潔面についても意識が芽生え、改善されてきた。

学習会だけでなく、日々の寄宿舎生活の中で、その都度場面を捉え、社会自立に向けて人との関わりを良くするためのエチケットやマナーについて支援してきた。しかし、児童生徒の障害や性格の違い、家庭環境による影響も大きく、対応や支援に苦慮する場面が多かった。そのたびに、言葉掛けをし、根気強く支援しても継続した効果が見られにくいことがある。児童生徒の実態を見直し、課題や目標について評価を行い、改善し定着が図られるよう、支援を継続していくことが大切であると痛感する。

3 平成26年度の取組

今年度は、「主体性と対人スキルの向上を目指して」というテーマで研究推進をしている。昨年度に引き続き、南上棟では学習会を通して、人との関わりを良くするための方法としてエチケット・マナーや対人スキルを身に付けられるよう取り組んでいる。

昨年と同様に重点目標を「整理整頓をする。」「ルールを守る。」「相手のことを考えて行動する。」の三つに絞り、分かりやすい具体的なエピソードを提示して問題点を見付けるようにした。表情ポスターなどの視覚的補助を用いたり、適切なモデルを示して見せたりして、理解できるよう工夫した。

(1) 第1回 南上棟学習会の内容 (対象者：中学部・高等部生徒 12名)

ア 実施時期 6月

イ 実施主題「整理整頓をする。」

ウ 実施内容

(ア) 整理整頓の方法について説明をする。

(イ) 整理整頓をしている衣装ケースの中身を見て、片付けの仕方を考える。

(ウ) 整理整頓の大切さを教える。

<事例 1> 対象生徒 高3生徒 A

生徒の実態
・入舎8年目で、基本的な生活習慣は自立している。他生とのコミュニケーションも取れ、誰にでも優しく接することができる。精神的に不安定になることがあり、体調を崩すこともある。卒業を前にして、精神的、体力的にも力強くなってきている。 ・整理整頓が苦手で、衣服を畳むのが雑な面が課題として挙げられる。
支援の経過
・衣装ケースの中を自分の使いやすいように仕分けると、片付けができやすいと説明した。 ・整理整頓の良い点を説明し、片付けをしてきれいになると心もきれいになることや、見えない所もきれいにする事の大切さを伝え、意識付けを図った。
指導後の生徒の様子
・「先生、衣装ケースの中を片付けるので小さな箱を下さい。」と言ってきた。空箱を利用して衣類を丁寧に畳んで入れていた。 ・2学期になり「先生、衣装ケースの中がきれいになったので見てください。」と言ってきた。きれいにできたことを褒めると笑顔で喜んだ。
考察
・整理整頓の方法を具体的に示すことで、やり方が分かり、自信を持って取り組めるようになってきた。また、身の回りの整理整頓をすることの大切さも理解できてきたと思われる。

(2) 第2回 南上棟学習会の内容 (対象者: 中学部・高等部生徒 12名)

ア 実施時期 7月

イ 実施主題 「気持ちの良い関わり方について」

ウ 実施内容

(ア) 「仲間に入れてほしいな」という題で、3人がトランプをしている絵を見て説明をする。

(イ) 絵を見てみんなの中に入りたいたときには、どうしたらいいかを考える。

(ウ) 絵や文章の問い掛けに対して、どのような言葉を言ったらいいのかを考える。

(エ) 友達の発表を聞いたり、自分の意見を言ったりする。

(オ) 話の内容が理解できているか確認するため、プリントに感想を書く。

エ まとめ

中学部・高等部生を対象に話を進めたが、話の内容が理解できにくい児童生徒もいた。絵や分かりやすい文章で説明することで、発表や発言ができやすかったように思う。児童生徒の感想の中には、「いろいろな言葉掛けや表現方法があることが分かった。」「優しく接することの大切さを学んだ。」「言葉掛けにより周りの人たちに対する影響も大きいと分かった。」と言う意見があり、学習会での内容が理解できていたのではないかと考える。

<事例 2> 対象生徒 中3生徒 B

生徒の実態
・友達を傷つけてしまうような言動を取ったり、指導員の目の届かない所で意地悪をしたりする。他の先生や保護者に言わなくてもいいことを言ったり言ってはいけないことを話したりする。相手や周りの状況が読めない。自分の悪い事は言わず、他

の事を細かく言い上げる。呼んでも返事をしない。謝ってもその場限りで、間違いを注意してもすぐ忘れる。

- ・自分に関わってほしいという気持ちの表れからか、常に指導員に話し掛けてくる場面も多い。友達との関わり方が不適切でトラブルが多い。
- ・当番活動や浴槽掃除は意欲的に取り組める。上手にできたときは賞賛すると喜び笑顔が多く見られる。
- ・他生からは、本生徒について、食堂で同じことを何度も繰り返し言い、今ここで言わなくてもいいことを言い、おしゃべりが多いと捉えられている。

支援の経過

- ・食堂の席を他生の席から離れた所にし、一定期間、様子を見た。その後、指導員が注意事項を分かりやすい言葉で確認した。
- ・相手の立場に立って話をしたり、行動したりするよう場面を捉え、その都度分かりやすい言葉で伝えた。
- ・同室生とのささいなトラブルでお互いが言い合いをし、「言った。」「言わない。」と口論となり、そのたびに指導員に仲裁を求めるため、言葉で伝えることや友達との上手な関わり方について場面を捉えて知らせていった。

指導後の生徒の様子

- ・日常的な会話の中でも、相手が傷つく言葉を繰り返すため、自分の取った行動について考え、反省する時間を持ち、具体的に分かりやすく説明する。そのたびに「ごめんなさい。」「すみませんでした。」と言うが、継続した効果が見られにくいことが多い。

考察

- ・学校でも攻撃的な言葉を言ったり、意地悪をしたりするとの報告があり、寄宿舎でも同じような行動がうかがえる。必要以上に指導員に話し掛け、スキンシップを求めてくることも多い。今後の指導・支援については、関係者と共通理解を図り、継続して取り組む必要がある。

(3) 第3回 南上棟学習会の内容 (対象者：中学部・高等部生徒 13名)

ア 実施時期 9月

イ 実施主題 「相手のことを考えて行動する」

ウ 実施内容

(ア) 重点目標の確認をする。

「ルールを守る。整理・整頓をする。相手のことを考えて行動する。」

「相手のことを考えて行動する」と言うのはどういうことか。

相手に迷惑を掛けない。相手に嫌な思いをさせない。

言葉や言い方による気持ちの違い。具体的なエピソードを提示し考えてみる。

(イ) 相手の気持ちを知ったり、自分の気持ちを伝えたりするために、感情と表情のマッチングをする。



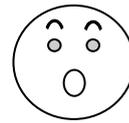
うれしい
たのしい



あんしん
ホッとする



おだやか
落ち着いている



おもしろい
感心する



ざんねん
くやしい



おどろき
びっくり



イライラ
おこる



びくびく
こわい



ふあんしんばい
きんちょう

(ウ) 気持ちの温度計で自分の気持ちの状態を知る。

気持ちの温度計は人によって違う。時間を掛けてゆっくり上がって行く人もいるけれど、急に爆発する人もいる。友達を嫌な気持ちにさせないように、逆にいい気持ちの温度を上げていくようにする。

(エ) 気持ちの葉に自分の気持ちを書く。

最近の自分の気持ちを葉っぱに書こう。

感情を表わす言葉を書いた「気持ちの葉」を木の絵の上に貼って気持ちツリーを作ろう。「楽しかった」「嬉しかった」「嫌だった」など。

(オ) ストレス解消の仕方を考える。

嫌なことがあったら、先生や友達に話をして嫌な思いをため込まないようにする。人や物に当たるのではなく、運動やカラオケなど、自分なりの解消法を見付ける。

4 まとめ

表情と気持ちのマッチングを確認したときは、みんな熱心に見ていた。抽象的な言葉である感情語彙を、具体的な場面を提示することで理解することを目的とした。相手の表情を読み取ることが苦手な児童生徒には、良い機会となった。気持ちの葉は、書き方を理解して数枚記入する生徒やどうやって書いていいのか尋ねる生徒もいた。

気持ちを表す言葉を弁別したり、言葉のイメージを付けたりする学習につながったのではないかと思う。

<事例 3> 対象生徒 中2生徒 C

生徒の実態

- ・入舎して8年目になり、基本的な生活習慣は身に付いている。自閉的傾向があり、納得いかないことがあると大きな声で叫ぶ。事前に話をし、短い言葉で視覚的に行動の手順を分かりやすく説明すると内容を理解し行動に移すことができる。
- ・テレビ、ビデオ、紙芝居、絵本が好きでお宝袋に入れて、いつも持ち運びをしている。物の貸し借りやルールは守りにくい。

支援の経過

- ・点呼時に紙芝居、ビデオ、本、ぬいぐるみなどを持って参加しようとするため点呼時は持って行かないことを話すと大きな声を出し、廊下に座り込み泣いた。その後、本人の状態が落ち着くのを待って、再び「どうするのだったかな。」と伝える

<p>と15分くらいして「預かってください。」と言い、点呼を受けた。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・南上の学習会に参加するが、始まるとすぐ友達のそばに行き、寝転がり騒いで押し入れに入る。「相手のことを考えて行動する。」というテーマで話を進める。
<p>指導後の生徒の様子</p> <ul style="list-style-type: none"> ・押し入れから話の内容を聞き、気持ちのカードの顔のイラストを使い、「先生は今こんな気持ちよ。」と説明すると、話を聞いて謝り、学習会の内容を最後まで聞いた。再び顔のイラストを示すと「さっきはごめんなさい。」と言った。
<p>考察</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話の内容を事前に説明しておく、ルールを守って生活していくことが少しずつできている。視覚的な手掛かりを用いて相手の気持ちを伝えると理解しやすい面もある。見通しが持てる支援や、分かりやすい伝え方をすることが大切である。

5 今後の課題と考察

今年度、南上棟の学習会は毎月重点目標を挙げて取り組んだ。時間帯も19:00から30分間という限られた時間だったが、児童生徒たちは落ち着いて学習会に参加した。整理整頓については、全員で取り組めるよう棟の月目標にし、洗濯物をきれいに畳むことを意識しながら、衣装ケースの仕切り箱に片付けている姿が見られた。児童生徒たちの中には、言葉での表現が難しく、自分の気持ちが相手に伝えられなかったり、衝動的で感情が高ぶり暴言を吐いたりすることはまだまだある。しかし学習会で学んだことを受け入れ、相手の気持ちを考えた関わり方や言葉掛けができるようになってきているように思う。

みんなが気持ちよく、安心した楽しい生活ができるようルールを守り、同年代の仲間と一緒に集団生活する中で、お互いの長所や短所を理解し、認め合い刺激を受け成長して欲しいと思う。

6 おわりに

卒業後、社会に出て、いろいろな人と関わりうまくコミュニケーションが取れ、たくさん友達を作ってほしいという思いは、保護者の願いでもあると考える。目先の成果を、求めるのではなく、先を見据えた継続的な支援を気長く続けていくことが大切であると感じた。さらに個々の持っている力や能力の見極め、児童生徒の理解も重要だということを改めて思う。児童生徒たちが自信を持って、一人でも多くの人と関わるができるよう、私たち指導員も研さんを積んで支援を続けていきたい。